

＼ 明日の防災に活かす ＼

災害の歴史

日本列島の誕生
～奈良時代

監修
NPO法人防災情報機構会長
伊藤和明



1



小峰書店



＼ 明日の防災に活かす ＼

災害の歴史

平安時代
～戦国時代

監修
NPO法人防災情報機構会長
伊藤和明



2



小峰書店



＼ 明日の防災に活かす ＼

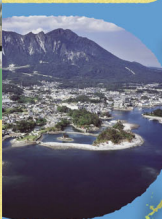
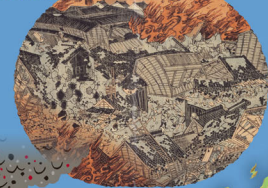
災害の歴史

安土桃山時代
～江戸時代

監修
NPO法人防災情報機構会長
伊藤和明



3



小峰書店



＼ 明日の防災に活かす ＼

災害の歴史

明治時代
～昭和時代中期

監修
NPO法人防災情報機構会長
伊藤和明



4



小峰書店



＼ 明日の防災に活かす ＼

災害の歴史

昭和時代後期
～平成・令和時代

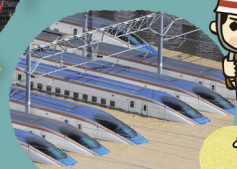
監修
NPO法人防災情報機構会長
伊藤和明



5



小峰書店



昭和時代後期

どんな時代？

公害をなくす努力

第二次世界大戦後の日本の急激な経済成長は、日本を世界有数の経済大国へとおし上げましたが、その反面、公害問題なども生み出しました。

とくに大きな被害を出した新潟水俣病、四日市ぜんそく、イタイイタイ病、水俣病は四大公害病といわれます。公害をおこした企業が裁判で負け、国の責任も問われました。そこで、環境庁（今の環境省）が設置され、公害問題をはじめ、さまざまな環境問題の解決にあたることになりました。

この公害裁判や、1973年におこった石油危機などがきっかけとなり、日本中で、公害対策に取り組むようになりました。企業は有害な物質を工場外に出さない装置を開発したり、工場緑化などの対策を積極的におこなうようになりました。その結果、空には青空がもどり、川や海にも魚がもどるなど、日本の環境は大きく改善しました。

省資源・省エネルギー化の動き

1973年の石油危機（オイルショック）は、産油国が原油の値段を一気に4倍にしたことからおこりました。灯油やガソリンなどの燃料、プラスチック製品、また、電気代やガス代など、すべてが大きく値上がりし、狂乱物価といわれる状態になりました。

このため、日本をはじめ、アメリカなどほかの先進工業国の経済も不況になりました。

不況を乗り切るために、日本の政府は公共事業をふやし、各地に高速道路をつくったり、橋やトンネル、新幹線をつくったりしました。こうすれば、建設業がうるおい、そのお金が最終的には国民にまわるだろうと考えたのです。企業は、品質向上につとめながら、省資源・省エネルギー化を進め、コンピュータや作業ロボットを導入して従業員をへらすなどの経営の合理化を進め、さらに輸出によって不況からぬけ出そうとしました。

経済大国になったが

こうして、日本は世界中でいち早く、不況からぬけ出しました。自動車や電気製品を中心に、安くて性能のよい製品を次つぎにつくり、買い手の希望にあったものを開発する日本企業を世界中がおどろきをもってむかえたのです。この背景には日本人の勤勉さ、学習意欲の高さがあるといわれています。

こうして、日本はアメリカに次ぐ経済大国になりました。しかし、アメリカなどとの間に貿易摩擦の問題がおきてしまいます。安くて性能のよい日本の製品が大量に輸出されてくると、自国の同じ産業がおとろえます。そのため日本の製品に高い関税をかけ、自国の製品を日本が買うようせまりました。

こうして経済大国になった日本は、1980年代後半には実力以上に国内外から評価され、土地の値段や株の値段が上がり、バブル経済の時代になっていきました。

くらしの変化

今では、ほとんどの町で見かけるコンビニエンスストアは、1974年に誕生しました。同じころに、ハンバーガーショップなどのファーストフード店、ファミリーレストランなども登場しました。女性が男性と同じように働くようになって家庭生活が変わり、外食することもふえてきたのです。また、世帯の収入がふえたことで、国内だけでなく、海外へ旅行する人も多くなりました。

生活が豊かになり、高校、大学へ進学する人がふえましたが、受験競争もはげしくなりました。子どもたちは塾や習い事でいそがしくなり、みんなで遊ぶ時間が少なくなってしまいました。そこに登場したのが、ファミコンです。ファミコンが1983年に発売されると、あっという間に広がり、子どもたちは一人で遊ぶ時間がふえました。そして、外で遊ぶ時間はへってしまいました。



全島民が島外避難する 1986 年の伊豆大島の噴火や、日本海での大きな津波など、想定外の災害がおこりました。一方、アメダスやひまわりなどにより、天気予報は精度が高まり、とくに台風による死者は大きくへってきました。また 1988 年に完成した青函トンネルは、1954 年の洞爺丸台風を経験して計画されたものでした。

西暦
(年)

おもな出来事と災害

- 1974 5月、伊豆半島沖地震
- アメダス観測開始
- 1976 9月、台風17号
- 1977 気象衛星「ひまわり」観測開始
- 8月、有珠山噴火(～78年)
- 9月、沖永良部台風
- 1978 1月、伊豆大島近海地震
- 6月、宮城県沖地震
- 1980 7月～9月、冷害
- 1982 7月、昭和57年7月豪雨(長崎大水害)
- 1983 4月、山林火災(東北、焼失8685ha)
- 5月、日本海中部地震
- 7月、昭和58年7月豪雨(山陰大水害)
- 1985 日本航空123便墜落事故
(世界最大の航空機事故)
- 1986 旧ソ連(今のウクライナ)チェルノブイリ原子力発電所で事故
- 11月、伊豆大島噴火
- 1988 青函トンネル開通

1982年 昭和57年7月豪雨(長崎大水害)

1982(昭和57)年7月23日～24日未明にかけて、長崎地方を豪雨がおそった。重要文化財の眼鏡橋など多くの石橋に被害が出たのが特徴である。死者・行方不明者は299人。



橋の半分がこわれた重要文化財の眼鏡橋
(提供：共同通信社)



長良川が決壊して水びたしになった安八町
(地早提供)

1976年 台風17号

9月、雨量合計800億トンという歴史上もっとも多くの雨を降らせた台風がおそった。西日本を中心とした豪雨で、雨量が1000mmをこえたところも多く、小豆島(香川)では山くずれがおき、土石流により多くの死者が出た。岐阜では長良川の堤防がこわれ、安八町が水につかった。全国の死者・行方不明者は167人。

1983年 昭和58年7月豪雨(山陰大水害)

7月20日から各地で豪雨となり、とくに22日深夜から23日午前にかけて、鳥根と山口ではげしい集中豪雨となった。鳥根県西部では雨量が500mmをこえて益田市などで大水害となる。全体で死者・行方不明者117人(うち鳥根県103人)。

1980年7～9月 冷害

7月から低温・日照不足が続き、8月にはそれがさらにひどくなって、九州南部と沖縄を除く全国的な冷夏は農作物に大きな被害をあたえた。イネの花が咲かなかったり、遅れたりして、実らず、不作となる。

火山灰にうまった車
(北海道洞爺湖温泉)
(提供：共同通信社)

1977～78年 有珠山噴火

1977年8月7日に噴火。大量の火山灰を周辺の農地や林にまき散らした。翌年10月に、集中豪雨によって、積もった火山灰が泥流となって流れ、有珠山全域に被害が出た。この二次災害で死者・行方不明者3人。

1983年 日本海中部地震 M7.7

5月26日昼の12時ごろ、秋田県沖で地震。日本海側では過去最大級の地震だった。

1988年 青函トンネル開通

1978年 宮城県沖地震 M7.4

6月12日午後5時すぎに、宮城県沖で地震。被害は宮城県に多く、仙台を中心にブロック解がくずれて、多くの人が亡くなった。大都市仙台をおそったことで、電気・ガス・水道が止まったことによる影響が大きく出た。死者28人。

1977年 沖永良部台風

9月9日、沖永良部島(鹿児島)で日本の陸上においてもっとも低い気圧907.3hPaを記録した台風。強風のために風速計の支柱が折れた。最大瞬間風速は80m/秒に達したとされる。死者1人。

1986年 伊豆大島噴火

4月ごろから地震が何度もおこり、11月15日に噴火が始まった。21日午後4時15分ごろ、崩れ自噴火が始まった。この噴火によって、全島民と観光客が島から避難することになった。約1万人が島外へ避難する、今までにない規模の集団避難となった。

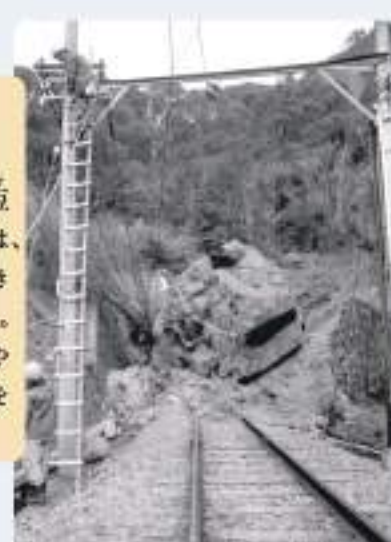
1974年 伊豆半島沖地震 M6.9

5月9日午前8時半過ぎ、伊豆半島沖で地震。伊豆半島南部に被害が集中し、斜面がくずれたことで、交通に大きな影響が出た。死者30人。

1978年 伊豆大島近海地震 M7.0

1月14日昼の12時半ごろ、伊豆半島と伊豆大島の間で地震。被害は、伊豆大島よりも伊豆半島東部で大きく、大規模な山くずれが発生した。くずれた土砂や落石によって線路や道路がうまり、交通に大きな影響をあたえた。死者25人。

静岡県河津町で落石が伊豆急行電鉄の線路をふさいだ。
(提供：共同通信社)



昭和時代後期におきた数多くの災害のうち、とくに今につながる災害をピックアップして紹介しましょう。

に ほん かい ちゅう ぶ じ しん 日本海中部地震

予期せぬ津波で大きな被害

1983年5月26日午前11時59分、秋田県の沖合約100kmで、M7.7の地震がおこりました。7～8分後に、津波が北海道・青森・秋田沿岸をおそい、その後日本海沿岸各地をおそいました。

秋田県の内陸部では、地盤の液状化がおこり、新興住宅地や港湾・道路・鉄道・干拓堤防に被害が出ました。この地震による死者は104人で、うち100人が津波による犠牲者でした。

当時、「日本海側には津波は来ない」という言い伝えがあったため、海に出て亡くなった人も大勢いました。また、気象庁が津波警報を発表したのは15分後の12時14分で、発表したときにはすでに第1波が到着していました。

この地震後、気象庁は津波警報を地震発生後10分以内に発表できるよう津波監視システムを強化しました。

秋田港の被害 大浜2号岸壁では亀裂が生じて、地面が陥没した。(秋田県提供)



津波で転覆した漁船 (提供元 青森県)



遠足の小学生が犠牲に

男鹿半島の海岸で津波にあった秋田県合川南小学校5年生だった福岡真理子さんの手記によると、「何がなんだか分からないうちに、波にのまれ、助けて！とさけぶこともできず、もうだめだと思ったとき、だれかにひっぱられ、ボートが来て、やっと助け上げられた」とあり、「いくら天災だからといっても、友達をうばうような海がにこいず」と結んでいます。

福岡さんたちは、4・5年生の遠足で、お弁当を食べているときに津波におそわれました。波にのみこまれた子どもたちを、地元の人の船がロープを使って必死に助けようとしたのですが、45人中13人が亡くなってしまいました。

日本海中部地震の震度分布図



い す おおしま ん か 伊豆大島噴火

1万人が無事に避難した

565年ぶりの割れ目噴火

1986年11月15日午後5時25分ごろ、伊豆大島の三原山山頂火口から噴火が始まり、溶岩が噴水のように高さ500mにまでふき上がりました。

11月19日には、山頂火口から溶岩が流れ出し、その時点では安全だったので、見学に観光客も多数訪れました。ところが11月21日午後2時ごろからはげしい地震が続き、午後4時15分にはカルデラ床で新たな噴火が始まりました。火口が山腹にまで広がり、割れ目噴火がおこったのです。伊豆大島で、山腹割れ目噴火がおこったのは、1421年以来565年ぶりのことでした。

割れ目噴火に続き、外輪山に開いた火口の一つから溶岩が流れ出し、町役場のある元町までせまってきました。そこで、島民全員が島外に避難することになりました。

1万人全員が島から避難

港には海上保安庁、海上自衛隊の船やフェリーが待機していて、午後10時50分から避難を開始、翌日の朝5時20分には避難を終えました。

島民約1万人、観光客2000人が無事に避難できたのは、海がおだやかだったことと、島民の団結がかたかったことがあげられます。

この噴火によって、死亡した人はいませんでした



(気象庁資料を元に作成)



山の斜面に開いた火口列 (大島町提供)

が、島民たちは約1か月、東京都内の体育館などで避難生活を送りました。家は戸締まりもせず、大事な家畜を残したままです。畑には出荷間近の観賞用の花もそのままになっていました。島民たちの帰島の要望は日増しに高まりました。そして、12月22日に島に帰ることができました。

東京都内で避難生活を送る伊豆大島の島民たち (大島町提供)



三原山の火口から流れ出る溶岩流 (大島町提供)



カルデラ床での噴火のようす (阿部昭彦氏撮影)